

# 畜産業経営の功労で 鎌倉市から表彰



**鎌倉で唯一の豚舎を守る**

**中嶋 睦夫さん(城廻在住)**

「いつまで続けられるか判りません。家族からはもうやめたら、いつも言われてますよ」。

81歳の元気な老体にムチ打ちながら、現在でも約35頭のブタの面倒を見る。

かつては関谷インターの脇にある中嶋さんの敷地内で、約350頭のブタの飼育をしていた。10年ほど前、中嶋さんに大動脈瘤が見つかり手術を余儀なくされる。体力や先のことを考えて、その後10分の1程度の規模に縮小した。

「50年もやってきたんで、なかなかやめられないね」。朝の5時になるとブタの餌にする残飯あつめにトラックを運転、市内や周辺地区の企業、商店をまわる習慣はいまでもそのまま。豚舎に入れば「ブタの健康状態は、一目見ただけですぐ判る」。養豚への愛着はなかなか断ち切れない。

## 焼却ゴミの減量に貢献

鎌倉市等が主催する秋の収穫まつりの席上、平成23年度の鎌倉市優良農業者等表彰者の一人として、畜産業経営の合理化に努力した功績により、市長から表彰を受けた。

今回の表彰はご本人にも突然のことだったが、永年にわたっての畜産経営が評価されたことと同時に、鎌倉市にとって見れば、焼却に回る企業や商店の残飯類をブタの餌として循環する。「市の職員さんからは感謝されました。きっとゴミのことで(表彰は)考えてくれたのかねえ。トラックの車検が取れなくなるまで、しばらくは続けますよ」と笑う。

中嶋さんが養豚業に乗り出すきっかけになったのは、父親である先代が手がけた農業のための、たい肥作りにあった。

「家の前にたい肥小屋があり、そこに 10 頭ぐらいのブタがいました。その糞でたい肥を作るんです。本業は農家で、山ノ内の廉売所に野菜を出荷してました。しかし、親父も先のことを考えたんでしょうね。野菜の栽培には人手がかかる。これからは農業より畜産業だとね」。



=10 数年コロを運び、餌になる残飯を集めた愛車の横で=

## 50 年養豚一筋

15 歳のころから父親を手伝い、養豚業に精を出す。当時は静岡県の三島から袋井方面に子豚(コロ)を仕入れに行く。トラックに約 30 頭積んできて、それを生育する。3~4 カ月で 120kg 程度に育て、平塚や相模原の経済連(現在は横浜・食肉センター)でセリに出す。

ブタの餌は近在の三菱電機、住友電工等の企業、社宅から出る残飯類。また大船軒など食品業からの売れ残り品などで十分賄える。廃棄物としての処理代まで受け取ることが出来、さらに行政からはゴミの循環で喜ばれる。

かつて鎌倉市内にも養豚農家は 5 ヶ所ほどあった。都市化の波が押し寄せるとともにいつしか豚舎は姿を消し、現在では中嶋さんのところ 1 つだけになった。特に夏場や風向きによっては、周辺への臭気などで苦情が舞い込んだりもする。都市近郊での養豚経営は難しい選択を迫られていたからでもあった。

中嶋さんのところでも、定期的なブタの健診や、保健所の指導にのっとりた豚舎の整備は欠かさない。数百万円を投資して浄化装置も規模の大きなものに変更したり、最近でも衛生管理面の努力は続けてきた。



=育ったブタは一頭 120kg。数日後に出荷された=

### 農協の旅行では笑いの主に

「私の代で鎌倉市内の養豚もなくなる。寂しい気もするがそれも時代の変化。うちのブタは美味いんですよ。化学肥料より残飯ブタの方がずっと美味しいのにね」。

昭和 5 年 10 月生まれ。農協の旅行などでは、いつも同行者を笑いの渦に巻き込む。話術も笑顔も素晴らしい、カクシャクたる 81 歳。